

# ボトルシステムを利用したクマモト・オイスターの 中間育成について

養殖研究部 郡司掛 博昭

## はじめに

本県では、平成19年度から新たなブランド水産物として、クマモト・オイスター（標準和名：シカメガキ）の産業化に取り組んでいます。クマモト・オイスターの生産は、種苗生産、中間育成、現場養殖の大きく3つの段階に分かれます。産業レベルでの生産を行う上では、各段階で省力化を図ることが重要になってきます。クマモト・オイスターの生産では、これまで右の写真の「カラム」を用いて、中間育成を行ってきました。（図1）

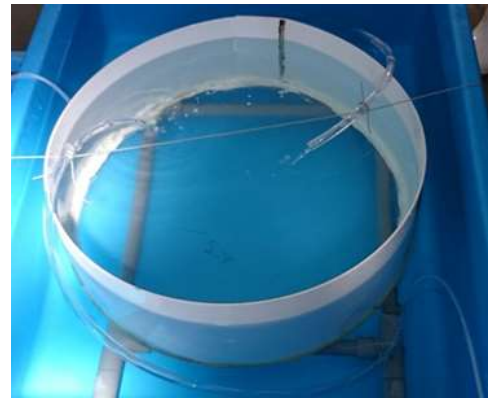


図1 飼育カラム

しかし、飼育管理に多くの労力と広いスペースが必要なことから、大量生産時での問題の一つとなっていました。

そこで、オーストラリアやアメリカ合衆国等の諸外国で使用されているボトルシステムを利用して、クマモト・オイスターの中間育成の省力化を図るべく育成試験に取り組みました。

## 試験内容と結果について

### ■試験に用いた稚貝

平成28年に熊本県水産研究センターで生産したクマモト・オイスター約1.7万個体を用いて、中間育成試験を開始しました。

### ■ボトルシステム

ボトルシステムを試作し、クマモト・オイスターの中間育成を実施しました。（図2）



図2 試作したボトルシステム

### ■中間育成の状況

餌料密度の違いによる成長速度差を検討するため、クマト・オイスターの稚貝を3つのボトルに分けて収容し、中間育成を開始しました。

稚貝の成長は、「稚貝の嵩(かさ)」で測定し、成長速度の比較を行いました。(図3)

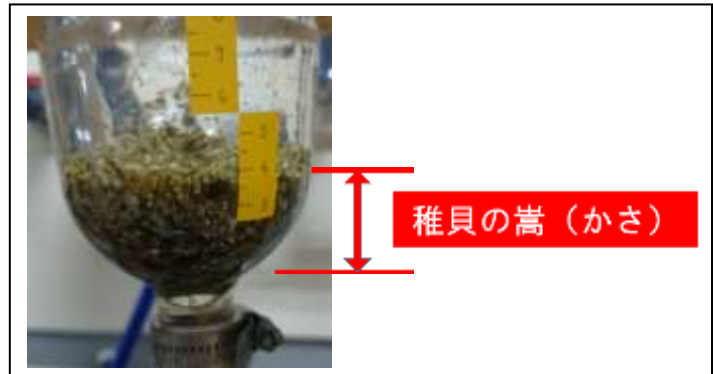


図3 稚貝の成長を測定する稚貝の嵩(かさ)

### ■中間育成の結果

稚貝の嵩(かさ)は、飼育開始後約2週間はほとんど増加しませんでした。

その後、約2週間目から次第に増加し始め、全てのボトルで試験終了まで、継続的に稚貝のかさが増加しました。

また、飼育期間中のへい死もほとんど確認されず、良好な結果が得られました。(図4)

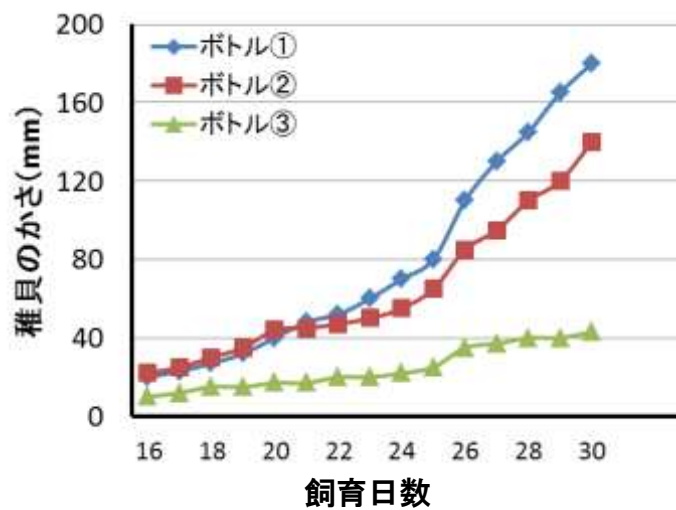


図4 稚貝の嵩(かさ)の推移



飼育14日目



飼育30日目

## 今後について

本年度の試験の結果、ボトルシステムを用いた中間育成が、クマモト・オイスターにおいても有効であることが分かりました。

しかし、実用化レベルでは今回の試験より更に多くの稚貝を収容することが考えられます。次年度はクマモト・オイスターをより高密度で飼育した場合の有効性や問題点などについて、更なる検討を行う予定です。